

一九八〇年代の児童文学誌にみる 「反核兵器」と「反原発」

高畑 早希

一、はじめに

二〇一二年の夏、雑誌『日本児童文学』（日本児童文学者協会）は二号にわたって、「3・11と児童文学」という特集を組んだ。前半号では「自然災害」と児童文学がテーマとなり、後半号では「原発・核の問題」がクローズアップされた^①。

後半号で、原子力と児童文学の関わりを論じた長谷川潮は、一九六〇年代以降、原子爆弾に関する作品が蓄積され、「原爆児童文学」というジャンルが設定されたのに比べて、原子力発電所を含んだ「原子力問題全体」への児童文学の「対応は遅かった」と振り返る^②。ここでの「対応」とは、長谷川自身が担ってきた児童文学の批評であるとともに、作家による実作を指すと考えられる。

確かに、原発をモチーフとする作品の数は、原爆児童文学と呼ばれる作品群と比較すると圧倒的に少ない^③。しかし、沢崎友美に

よれば、一九八六年のチェルノブイリ原子力発電所の重大事故以降、「一九九〇年代の半ばまでは、原発問題について様々な角度からアプローチする作品が見られていた」^④とされ、児童文学の批評・研究誌の側面を担っていた雑誌『日本児童文学』が、これらの作品にどのように応答していたのか、改めて気にかかる。

だが、結論から言うと、八〇年代の『日本児童文学』が、原発問題を扱う作品に応答した痕跡はほぼ見られない。

一九八〇年代前半はヨーロッパを中心に反核運動が盛り上がり、例えば、レイモンド・ブリッグズの『風が吹くとき』が紹介されるなど、『日本児童文学』にもその影響が看取できる。しかし、「反核兵器」と「反原発」の二つの要素が存在していた当時の反核運動のなかで^⑤、『日本児童文学』の立場は主として「反核兵器」の側にあり、同時代に出現しはじめた「反原発」の作品とは（すれ違い）があった。

本論は、この〈すれ違い〉の原因にまで踏み込む用意はないが、八〇年代の『日本児童文学』で展開された反核の言説をみることで、〈すれ違い〉の様相を概観していきたい。また、〈すれ違い〉の一方にある「反核兵器」と「反原発」の〈重なり〉について、いくつかの作品を事例に、これらの作品の特徴を紹介しつつ考察を行う。なお、原子力発電所を原子爆弾とつなげて考えるべきかいはなは、議論のあるところだが⁵⁶⁾、本論は、この時期の児童文学作品が両者をどのようにつなごうとしているのか、その試みを見る立場に立つ。

二、一九八〇年代の『日本児童文学』における反核の言説

八〇年代の『日本児童文学』の反核言説において、最初に目につくのは、「特集 作品・近未来戦への警告」（一九八一年二月号）である。この特集は、米ソの大戦を題材とする内容が、「核兵器賛美」的であるとされた映画『FUTURE WAR・198X』への抗議活動の一環として編まれた。映画の制作中止を求めた活動は、一九八一年の春頃から、「東映動画労組や、日本母親大会連絡会など約四十団体で組織」された「戦争アニメ『198X』に反対する会」を中心に展開され、『日本児童文学』誌上にも、活動を伝える記事が掲載されている⁵⁷⁾。

「特集 作品・近未来戦への警告」には、「若ものや、子どもたちを対象に、米ソの衝突による第三次世界大戦を想定し、子どもたちの気を引く現代的兵器・メカを動員して、日本の軍備増強を訴える」アニメ映画の制作に対抗し、児童文学の側から「有効な創造」を提案しようという趣旨で⁵⁸⁾、「石がしゃべる夜」（久保喬）、「暗

い夜のなかの灯」（桜井信夫）、「だれもない海」（新冬二）、「ブルーファイターズのゆくえ」（望月正子）、「生き残りゲーム」（砂田弘）の五作が掲載されている。

過去の「戦争体験を語りつぐことと同じく、近未来戦を語る」と⁵⁹⁾が重要であるとする特集の趣旨を受けて、これらの作品には、核シエルターへの避難や、ウォークマンによって身体が管理される未来など、当時の戦争児童文学にとつては新しいテーマである「SF・ファンタジー」への取り組みがみられる⁶⁰⁾。

なお、核戦争を語る際の新しい文学空間であった「核シエルター」については、レイモンド・ブリッグズのカートウーンの絵本『風が吹くとき』への注目も、この時期の『日本児童文学』の特徴である。『風が吹くとき』は、核戦争の備えを記した「お役所のパンフレット」に従って行動した結果、部屋に作った簡易シエルターのなかで死に至ることになる「善良な」夫婦を描いた作品である。

本作について長谷川潮は、「防護して生き残る」などということ、国家が国民に押しつけた幻想に過ぎないことを鋭く明らかにした作品と高く評価し、日本の児童文学は、「核と言えば広島・長崎という傾向が強く、現在の、そして未来の核について想像力を働かすことはまれ」であったとして、本作の想像力にならった実作が出てくるよう期待を記している⁶¹⁾。

三、原発を描いた作品との〈すれ違い〉——『夜の子どもたち』

ここまで、八〇年代前半までの『日本児童文学』の反核言説を概観したが、それらは主として戦争児童文学が築いてきた文脈を引き

継ぎ、核戦争や核兵器の危険、忌避感や抵抗を語るものが多かった。

本節からは、八〇年代半ばの『日本児童文学』の批評と、原発を描いた作品との〈すれ違い〉について、芝田勝茂『夜の子どもたち』（福音館書店、一九八五年）と、中澤晶子『1983年 熱い秋のノート』（原爆児童文学集19）汐文社、一九八五年）、『あしたは晴れた空の下で——ぼくたちのチェルノブイリ』（汐文社、一九八八年）を事例に確認していきたい。

まず、『夜の子どもたち』について。本作は、八塚市という架空の地方小都市の教育委員会から、五人の登校拒否生徒のカウンセリングを依頼された森山正夫が、子ども達と八塚市の「夜のタブー」に迫っていく物語である。

八塚市は全国でも稀な「非行ゼロ」の教育都市であったが、この実績の裏には、夜七時以降の外出を禁止する条例の存在があった。

他の地域では奇異にみえる条例も、夜に外を出歩くと「夜の王」である「カレルピー」に呪われるという古くからの「信仰に近い共同の規範」⁽⁴⁾が維持されている八塚市では、「夜間外出禁止条例」は制度として浸透している。不登校になった五人は、それぞれの理由でこの条例を破って外出した経験があり、正夫は、このことが子ども達の心理的圧迫になっていると診察する。正夫は、タブーに立ち向かわせるために子ども達と「夜の散歩」に出かける。しかし、彼らはこの散歩で、「夜の王の墓」として立ち入りを禁じられてきた古墳の裏に、近原の原発から出た核廃棄物を集める貯蔵所と、国の核ミサイル基地があることを知る。物語は、夜のタブーを克服した子どもと正夫達大人が、八塚市の「真相」を暴露し、国の陰謀に立ち向かうことを決意するところで閉じられる⁽⁵⁾。

『夜の子どもたち』は「第26回日本児童文学者協会賞」にノミネートされるなど、『日本児童文学』誌上でも注目がみられる。しかし、本作に対する反応は、「登校拒否の問題を、大人、子どもを問わず大きな力によって管理され、支配されていることを推理小説ふうに書いて、異色の作であった」という赤木由子の選評⁽⁶⁾や、「登校拒否の克服が五人の子どもたちにとつてのりこえねばならぬインニエーションだとすれば、そうした問題と真に向き合える自分になるという課題は、正夫にとつてのインニエーションでもある」という藤田のぼるの評⁽⁷⁾のように、「登校拒否」の問題や、それをめぐる大人と子どもとの関係性に集中し、核廃棄物の貯蔵や原発、核ミサイル基地の問題については、特に議論された様子はない。

当時の児童文学は、校内暴力や登校拒否など「現実の子どもたちの変容が大きく社会問題として認識されるなかで」、柄谷行人の「児童の発見」（『日本近代文学の起源』講談社、一九八〇年）や、フリップ・アリエスの『子供』の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活（みすず書房、一九八〇年）の出版なども重なり、従来の「子ども観」が問い直される時期にあったことはよく知られる⁽⁸⁾。『夜の子どもたち』の原発への想像力は、そうした子どもをめぐる多様な社会問題への対応が求められるなかで、見過ごされてしまったのではないか。

四、原発を描いた作品との〈すれ違い〉 ——『1983年 熱い秋のノート』

一九八六年の『日本児童文学』のなかで、もう一つ見過ごせな

い作品が、中澤晶子『1983年 熱い秋のノート』である。本作はドイツでの反核運動を描いたもので、原発についての言及はない。しかし、この後、チエルノブイリの事故後の様子を、西ドイツを舞台として書く中澤にとつて、デビュー作である本作は重要な意味を持つためここに取り上げる。

『1983年 秋の熱いノート』は、西ドイツのノルトラインラント・ヴェストファーレン州に住む一二歳の島本ツトムの視点で書かれる。

冒頭、ツトムは父親に病院へ連れて行かれ、父と一緒に血液検査をさせられる。父や担当のドクトル・フランクに、検査をする理由を聞いても明確な答えを得られないツトムは、憂鬱な日々を過ごす。隣のクラスのクルトの家で開かれたガーデン・パーティーへ参加することで事態は変化していく。パーティーには、大学生のクルトの姉とその仲間も参加しており、彼等は新型核ミサイルの配備に反対する集会の準備について熱心に話していた。

大学生達の会話に「広島」の話題が出たことで、ツトムは、かつて一度だけ行ったことのある父の郷里の広島と、そこに住む祖母のことを思い出す。ツトムは友人達から「広島のこと」について質問され、祖母と観た原爆資料館の印象を話すが、原爆の後遺症について質問されると返答に窮する。

父が広島のことを語りたがらない理由と、病院での検査の関係について煩悶するツトムは、「ほんとうのことが知りたい」と祖母に手紙を出す。祖母からの返事待の間、ツトムは、ガーデン・パーティーで会ったクルトの祖父から、自身の祖父父母がかつてドイツに住んでいた事実を聞かされる。

ツトムの手紙を読んだ祖母は、彼の熱意に動かされ、直接ドイツを訪れる。そして、三八年前、医師だった祖父と共にドイツに住んでいたこと、帰国したのちに広島で被爆し、祖父は放射能のためその年の九月に亡くなったこと、妊娠中だった祖母の胎内で父が被爆したことが、ツトムが被爆二世であることを明かす。

父は、祖母がツトムに原爆の話をしたことを非難するが、ツトムは「ほんとうのことがわかって、ほっとしている」と語る。ツトムと父、父と祖母の溝は埋まらないが、祖母は、ドイツ時代の友人の孫が開く集会で、被爆体験を語るという依頼を受け、ツトムやツトムの母のほか、たくさんの人々が集まる教会で自身の体験を語る。祖母の語りの後、一九八三年一月二日には、首都ボンで反核大集会が開かれ、二百万人の人がパーシングII型ミサイルの配備に反対する。しかし、一月二二日、西ドイツ連邦会議は、ミサイルの配備を六〇票の差で可決承認し、一九八三年のツトムの「熱い秋」は終わりを告げる。

あらずじを長めに紹介したが、特徴的なのは祖母の存在である。祖母は、父と子の対立の間に入ると同時に、「真実」を語る語り部として、ドイツの反核運動と広島原爆を結びつける役割を担う。この祖母の描き方は、例えば、同時期（ただし、チエルノブイリの事故後）のドイツで、グードルン・パウゼヴァング書いた原発作品『みえない雲』に出てくる「真実」を見つめようとしぬ祖母とは対照的な描き方である¹⁶⁾。しかし、被爆証言グループによる語り部活動が起こっていた広島¹⁷⁾の状況をふまえると、ここでの「真実を語る祖母」という造形は、児童文学としては無理のない設定であるように思われる。

ただ、「第19回日本児童文学者協会新人賞」にノミネートされた本作について、選評は「一九八三年熱い秋のノート」は、汐文社の原爆児童文学シリーズとして刊行された中にある注目に値したが、舞台をドイツに設定したことのせいか、リアリティーを欠くうらみがあった⁽¹⁸⁾と評し、本作は新人賞の受賞には至っていない。

中澤晶子は、二〇一二年のアーサー・ビナードとの対談のなかで、「日本の児童文学はチエルノブイリを題材に創作なんてしないだろうなと思った」と振り返るが、そのように考える原因の一つには、「舞台が外国だから、なじみにくい」とされたデビュー作へ批評が影響していると考えられる。

「ヨーロッパで大きな反核運動が起こったときドイツにちょうど住んで」いた中澤にとつて、『1983年 熱い秋のノート』と、チエルノブイリを題材とした『あしたは晴れた空の下で』は、「わりとすんなりつながり、日本では書けなくとも「ドイツなら書ける」という思いを強くしたという⁽¹⁹⁾。

五、『あしたは晴れた空の下で』

『あしたは晴れた空の下で ぼくたちのチエルノブイリ』（汐文社、一九八八年）について長谷川潮は、「チエルノブイリを主題にした、おそらく日本で唯一の創作児童文学である」（特集 3・11と児童文学Ⅱ）二〇一二年九・一〇月号と評している。絶版となっていた本作は、改装版が二〇一一年七月に出版され、福島第一原子力発電所の事故後、再び広く読まれることになった。

中澤は執筆時にはすでに日本へ帰国していたが、西ドイツの友人や

読書グループから資料を送ってもらって、本作を書き上げたという⁽²⁰⁾。

一九八六年四月のチエルノブイリ原子力発電所の事故後のヨーロッパの様子を、ケルンを舞台に一二歳のトオルの視点から語った本作は、放射能を含んだ雲が南下するにつれて狂っていく生活の歯車を「食」と「いのち」をテーマに描く。

放射能の畜産への影響や、安全な食べ物を求めるドイツ人の関心が日本の食材に集まる様子、また、妊娠中のトオルの母親が食べ物の汚染に敏感になり、ほかの母親たちと一緒に粉ミルクを共同購入する展開など、「食」への関心は、福島の事故後にも共通する事態を描いている。

また、本作は、西ドイツの教育にも焦点を当てており、子ども同士が原発についてディスカッションする様子や、そのなかでの衝突を書いている。例えば、原子力発電所の技師を父に持つブリギッテという少女は、便利なくらしを選ぶなら、何が起きても「自業自得」であると発言してクラスの饗堂を買う。

孤立したブリギッテは、父親が働く原発のある町に転校することに決める。引越しの前、ブリギッテはトオルにだけ、発言の真意——原子力発電所を批判するだけでなく、スイッチひとつでなんでもできるような便利な生活を好む考え方自体を見直すべきだ——を告げて町を去る。

冬になり、トオルは「無事に」生まれた弟の手に触れながら、ブリギッテの言葉を反芻し、チエルノブイリの事故によって得た経験が、新しい「いのち」とともに、「一九八六年のバトン」として未来につながることを望み作品は閉じられる⁽²¹⁾。

六、おわりに——チエルノブイリを描くもう一つの世界

これまで、児童文学と反核をめぐる言説について概観してきたが、反核をめぐる二つの要素のうち、主として「反核兵器」の言説が目立つ八〇年代の『日本児童文学』では、同時代に出現しはじめていた原発をモチーフとする作品の「原発」の要素は見過ごされていたといえる。

その理由としては、子どもをめぐる多様化した社会問題への対応のなかで、原発の問題までを取り扱う余裕がなかった可能性と、ソ連の原発事故やドイツでの反核運動に「なじみにくさ」を感じる批評家の問題、そして、本論では検討しきれなかったが、『日本児童文学』の政治的な立場なども関係していると考えられる。

長谷川潮は、『あしたは晴れた空の下で』をチエルノブイリを主題とした「日本で唯一の創作児童文学である」と評しているが、本論は最後に、チエルノブイリをテーマにした、もう一つの創作児童文学を紹介したい。「日本の児童文学はチエルノブイリを題材に創作なんてしないだろう」という、中澤晶子のかつての論念を良い意味で裏切る創作は、一九八〇年代の後半に、『日本児童文学』が用意した批評空間とは異なる場で試みられていた。

注目するのは、北欧のラップランドの先住民サーメの少年と、日本人の少女の交流を描いた、清水道尾『遙かなトナカイの国』(岩崎書店、一九九一年)である。

本作の初出は、真宗大谷派宗務所の発行する『同朋』という月刊誌だ。『同朋』は信徒向けの機関誌であるが、八〇年代の誌面には、児童文学者の寄稿や、幼児教育の記事、子ども向けの本の紹介記事などが散見される。この後紹介する清水も「お母さんが読

んであげるおはなし」として二歳の幼児を主人公にした幼年童話「さとこ二歳」を一九八七年四月から八八年三月まで連載しており、この雑誌の編集部が、母親や幼児教育に携わる人を読者として想定していたことがうかがえる。

原発の問題については、チエルノブイリの原発事故後、早い時期から記事の掲載が見られ⁽²²⁾、原発をテーマにした清水の連載がはじまる一九八八年四月号には、甘蔗珠恵子『また、まにあうのなら——私の書きたいちばん長い手紙』(地湧社、一九八七年)の紹介が掲載されている。

作者の清水道尾(じみずみちを)は、日本児童文学者協会の会員で、『はじめてのおるすばん』(岩崎書店、一九七二年)や、『ちいちゃんえほん』全二作(ほるぶ出版、一九七四〜八三年)などの絵本を手がけた作家として知られる。また、東京の自宅に「子ども図書館」がやま文庫」をひらき、清水美千子名義で、子どもの本の研究・普及活動を行ってきた人でもある。

『遙かなトナカイの国』は二部構成で、前半の「ラップランド通信」が一九八八年四月から一九八九年三月まで、後半の「遙かなトナカイの国」が一九八九年四月から一二月まで連載された。いずれの連載にも、阿嘉まさこという「絵本作家をめざして勉強中」⁽²³⁾の女性が、毎号三枚ほどの挿絵を担当している。作者の清水は、「若い友だちのひとり」である阿嘉が、家族連れでラップランドを訪れたときのメモを読ませてもらいながら本作を執筆したという⁽²⁴⁾。

『遙かなトナカイの国』について、加筆修正された単行本版を元にあらすじを確認しよう。本作は、前後半ともに絵里という少女の視点から語られる。

前半は、絵里と画家の母親が、動植物の生態を撮るカメラマンの叔父に連れられてラップランドを訪問する様子が、絵里の友人である春香に宛てた手紙の形式で書かれる。手紙の内容は、先住民のサーメの人々の暮らしを伝えるもので、特に、トナカイに支えられたサーメの生活が、食事、放牧、観光、住居、祭りなど様々な面から描かれる。絵里は、傷ついたトナカイの世話をする少年ミッケルと出会い、ラップランドの文化やトナカイとの暮らしへの理解を深める。

後半は、絵里が日本に帰国してから約二〇日後、チエルノブイリの事故が起きた時点からはじまる。絵里はミッケル達のために原発の勉強を始め、脱原発の活動に参加していくのだが、その過程が、広島島の原爆ドーム前でのダイ・インや、愛媛の伊方原子力発電所の出力調整実験に対する抗議活動、また、日比谷での「『原発とめよう』一万人行動」など、同時代の実際の出来事と交わる形で描かれる。

本作で特徴的なのは、絵里が原発の問題に対して行動的な少女として描かれる点だろう。単行本版では、絵里の行動の原動力はミッケルとの手紙のやりとりにある。ミッケルの手紙から、絵里は自身が見聞きしたサーメの生活が立ちゆかなくなっていることを知るとともに、原発について学び始めたミッケル達から、「エリからの情報と、こちらで入手したものを照らしあわせれば、だんだん実体が見えてくる」、「ぼくたちがしなければならぬことがはつきりするはず」だから、「隠さず教えてください」⁽²⁵⁾と頼まれて「もっと原発のことを知りたい」⁽²⁶⁾と行動を始める。

絵里を原発の問題に向かわせる背景には、自然や生命への関心が強い母親の存在や、画家である彼女のアーティスト仲間（山小屋の仲間）が留意する環境的な要因も大きい。絵里は、以前から環境

問題に取り組んでいる母親から、勉強会で得た原発の情報を教えてもらったり、JR三鷹駅で母の所属する小さなグループの署名活動を手伝ったりするなかで反原発運動への参加の仕方を学んでいく。中学生になった絵里は、それまでに学んだことを踏まえ、弁論大会で脱原発について発表する。その際、反原発や脱原発を「唱えるだけ」でなく、いま、自分ができることやっていること」として節電をあげ、電力へ依存する生活の改善案として提案する。

以上のような絵里の描かれ方については、「反原発ニューウェーブ」と呼ばれた同時代の状況との呼応を考えると必要があると思われる。

「ごく普通の生活を送ってきた主婦」が中心的な運動の担い手であった⁽²⁷⁾、八〇年代の「反原発ニューウェーブ」について安藤丈将は、都市では、生協のような女性を中心とする地域組織のネットワークが反原発の運動のネットワークを担ったと指摘する。地域組織のネットワークは、「オルタナティブ」と呼ばれ、「暮らし方を変えることが、社会を変えることの一部」であるとして、具体的な生活に即した提案を行っていたという⁽²⁸⁾。

これは推測の域を出ないが、自宅でも子ども向けの文庫を運営していた作者の清水の周りには、「ニューウェーブ」の影響を受けた女性達の出入りがあったのではないだろうか。作中では、『危険な話』や『チエルノブイリ——アメリカ人医師の体験——上・下巻』、『ドキュメント・チエルノブイリ』、『見えない雲』などを読み⁽²⁹⁾、四谷公会堂の『原発いらないトーク&映画祭』に参加し、『ドキュメント・チエルノブイリ』や『脅威』などの映画を観て、ジャーナリストの松岡信夫やフォトジャーナリストのアイリーン・スミスの対談を聞く子どもたちの様子が描かれるが、これらは清水自身や仲間

たちの体験でもあったのではないかと、想像させられる。

「ラップランド便り」と「遙かなトナカイの国」が連載された雑誌『同朋』は、児童文学誌ではないことを再度強調しなければならぬが、『日本児童文学』のような雑誌が用意した言説空間とは異なる場で、「ニューウェーブ」と呼ばれた運動に呼応する児童文学が書かれていたことは、記憶しておいてよいだろう。

日本児童文学者協会の機関誌という中央誌的な性格を持つ雑誌以外の場での、児童文学者たちの原発に対する多様な取り組みについては、今後本格的に考察していきたい。

注

- 1 「特集 3・11と児童文学Ⅰ」『日本児童文学』第五八巻第四号、二〇一二年八月。「特集 3・11と児童文学Ⅱ」『日本児童文学』第五八巻第五号、二〇一二年一〇月。
- 2 長谷川潮「信頼」の行方——〈原子力〉と子どもの本——『日本児童文学』第五八巻第五号、二〇一二年一〇月。
- 3 例えば、楠田剛士は、一九五五年発行の水田九八二郎「原爆児童文学を読む」のリストには、重複するものを含めて「フィクション（童話、物語、絵本、マンガ、紙芝居など）は二二〇以上、ノンフィクション（手記、記録、エッセイ、詩歌、絵画、写真集など）は二〇〇以上あり、それ以降に発表されたものも含めると相当の数がある」と述べている（楠田剛士「原爆児童文学集」の語り」『綾説3 文学批評』第二号、二〇一五年二月、三八頁）。
- 4 沢崎友美「原発問題に挑む児童文学から〈物語の力〉を探る——たつみや章『夜の神話』を中心に——」『児童文学研究』第四五号、

二〇一二年一二月、二〇頁。なお、沢崎の論では、スリーマイル島の事故以後に発表された、原発をモチーフとする児童文学のリストが紹介されており、本論も多く参照した。

5 山本昭宏「反・核兵器」の運動と「反・原発」の運動」『原爆』を読む文化事典』青弓社、二〇一七年、一〇六・一〇七頁を参照。

6 中野和典「原子力発電所」『原爆』を読む文化事典』青弓社、二〇一七年、三六五頁。

7 「戦争アニメ」に抗議のノロシ」『朝日新聞』一九八二年一月一日朝刊、二二頁。「戦争アニメに反対しよう！」『日本児童文学』第二七巻第二号、一九八一年一月、二二〇頁。

8 北川幸比古「あながき」『日本児童文学』第二七巻第一四号、一九八一年一二月、一四三頁。

9 付言しておく、同時期に出版される『原爆児童文学集』（一九八五〜八六年）にも、SF作品への取り組みがみられる（北原尚彦「実はSF含有率が高かった〈原爆児童文学集〉」『SF希書コレクション』東京創元社、二〇一三年。楠田剛士、注3に同じ。）

10 長谷川潮「軍神と犠牲者のあいだ——国家の戦争像と個人の戦争像」『日本児童文学』第三〇巻第八号、一九八四年八月、二〇・二二頁。

11 芝田勝茂「夜の子どもたち」福音館書店、一九八五年、一三八頁。

12 本作について、福音館書店版（一九八五）の後に出版されたパロル舎版（一九九六）では加筆修正がある。特に後者の方では、国が核武装をする方針が強調される結末になっている。

13 赤木由子「描写力と作者の明い思想」『日本児童文学』第三二巻第七号、一九八六年七月、九一頁。

14 藤田のぼる「児童文学・八〇年代への予感」『日本児童文学』第三

二巻第六号、一九八六年六月、八頁。

15 佐藤宗子「1980年代（前半）の評論と研究」『現代児童文学論集 第5巻 転換する子どもと文学』日本図書センター、二〇〇七年を参照。

16 チェルノブイリの事故後の事故を想定する『みえない雲』では、「グラーフェンハインフェルト」の原発が未曾有の重大事故を起こす。事故当時、国外にバカンスへ行っていた父方の祖父父母は無傷で帰ってくるが、「絵本に出てくるような、典型的なおばあちゃん」（高田ゆみ子訳『みえない雲』小学館文庫版、一六頁）である祖母ベルタは、自分にとつて不都合なことは知ろうとせず、放射能のために家族が死んだことにすら気がつかない。『みえない雲』で「真実」を語る役割は、生き残った孫のヤンナ・ベルタが担っている。

17 茶園梨加「語り部」『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社、二〇一七年、三四六頁。

18 浜野卓也「新人賞選考経過報告」『日本児童文学』第三二巻第七号、九六頁。

19 アーサー・ビナード・中澤晶子「対談」われらみな「風下っ子」『日本児童文学』第五八巻第五号、二〇一二年一〇月、三五頁。

20 中澤晶子「あとがき」『あしたは晴れた空の下で ぼくたちのチェルノブイリ』汐文社、二〇一二年、一八七頁。

21 付言しておく、『あしたは晴れた空の下で』においては、子どもに放射能による「障害」が出ないこと、「無事に」生まれてくることを幸福として語る傾向がある。一方、福島第一原子力発電所の事故後の作品を見ると、このような「障害」への見方や描き方に、疑問を呈する作品も出ている（例えば、菅野雪虫「明日海」『日本児童文学』第五八巻第五号、二〇一二年一〇月）。

22 例えば、「松橋勇蔵さんにインタビュー」共感からすべては始まる、「雨がこわい」はいのちのさけび』『同朋』第三七巻第七号、一九八六年七月など。

23 『遙かなトナカイの国』岩崎書店、一九九一年、二三〇頁。

24 清水道尾「あとがき」『遙かなトナカイの国』岩崎書店、一九九一年、二二九頁。

25 注23、一三六頁。

26 注25に同じ。

27 高田昭彦「反原発ニューウェーブの研究」『成蹊大学文学部紀要』第二六号、一六一頁。

28 安藤丈将「脱原発の運動史——チェルノブイリ、福島、そしてこれから」岩波書店、二〇一九年、七七頁。

29 『危険な話』、『チェルノブイリ——アメリカ人医師の体験』、『ドキュメント・チェルノブイリ』については、初出の『同朋』一九八九年一月にのみ言及がある。『みえない雲』については、初出での言及がなく単行本版の絵りの演説のシーンで紹介される。

付記

本論は、第六五回原爆文学研究会（二〇二一年二月二五日）におけるワークシヨップ「一九八〇年代の雑誌にみる反原発思想」での発表を基に、大幅な加筆修正を施したものです。発表後、様々なご意見を頂き本論に反映させていただきました。特に、『風が吹くとき』の分析については高野吾朗さん、高山智樹さんから貴重なご意見を頂きました。また、相川美恵子さんからは、八〇年代の児童文学の様相についてご教示頂きました。末尾ながら深く感謝申し上げます。